

尾上木見津遺跡・駒詰遺跡

— 都の風薫る緑の器 —

囑託調査研究員 小 牧 美 知 枝

遺跡の位置と周辺遺跡

尾上木見津遺跡・駒詰遺跡は、印旛沼の南岸、高崎川北岸の標高32mの舌状台地上に位置する。台地中央部には近世佐倉七牧の一つ、「内野牧」の野馬土手が南北に縦走し、西の酒々井町、東の富里市との行政区として現在も機能している。そのため、台地上の2遺跡は本来同一遺跡であるが遺跡名が異なる。

本遺跡周辺には、奈良・平安時代の遺跡が多く分布し、同一台地上の北には竪穴住居跡や掘立柱建物跡が検出された新橋高松遺跡(1)、支谷東側には「奈野」の墨書土器が出土した寺沢遺跡(2)などが確認されている。最近では、高崎川の南岸で整然と配置された建物群や、「三倉」・「奈野」の墨書土器などが出土した飯積原山遺跡(3)などが知られている。

調査の概要

調査は平成21年から平成24年まで断続的に実施され、尾上木見津遺跡が3地点、駒詰遺跡が8地点の計11地点が発掘された。検出された遺構は、古墳時代の竪穴住居跡25軒、古墳3基、祭祀遺構1ヶ所、奈良・平安時代の竪穴住居跡38軒、掘立柱建物跡18棟、土坑墓23基などである。

古墳時代前期の集落と墳墓

古墳時代前期の住居跡12軒は西側の谷に面し、台地中央から南側にかけて広がる。集落の中央には1辺約7.0mと大型で、丸底埴と器台がセットで出土した駒詰遺跡(第2地点)10号住居跡が所在する。遺構の位置や規模、そして構造・出土遺物などから、集落の中核的な存在と思われる。この時期の墳墓は集落に隣接し、台地の南側から一辺約13mの方墳、尾上木見津遺跡2号墳が検出されている。

古墳時代中期の集落と墳墓

中期の竪穴住居跡は中央に9軒、南に1軒、北に2軒の計12軒が検出され、中央と両端部との間は空白地帯となっている。集落は、1辺約8mと大型で滑石製勾玉や白玉などの祭祀具が出土した駒詰遺跡(第3地点)9号住居跡を中心に、初期須恵器・鉄製品などが出土した2・3号住居跡などから構成されている。

集落の北側では滑石製の剣形品・勾玉・白玉、それに初期須恵器や大量の土師器高坏などがまとまって出土し、祭祀遺構が存在したことが明らかとなった。初期須恵器は、古墳や祭祀遺跡などで祭祀・葬送儀礼を行うために用いられたものと考えられており、石で製作した雛形品の石製模造品などと共に、新式の儀器として集落に持ち込まれたものと思われる。

台地先端には径約25mの駒詰遺跡1号墳が築造され、古墳時代中期は居住域を中心に北に祭祀施設、南に墓域が形成され、台地上に異なる機能の空間が展開していたことがわかる。

初期須恵器

印旛沼周辺で5世紀中葉～後葉段階の須恵器を出土する遺跡は、南岸では佐倉市大篠塚遺跡と本遺跡、東岸では成田市長田和田遺跡、西岸では印西市平賀遺跡群・松虫間所遺跡などである。出土地点は極めて限られ、大半は単体での出土である。しかし本遺跡は量・器種共に豊富で、しかも大阪府陶邑窯・愛知県猿投窯という当時の2大窯業生産跡から供給を受けている。こうした状況は初期須恵器の東国における在り方を考えるうえで貴重な事例となろう。

奈良・平安時代の集落

奈良・平安時代は台地中央に掘立柱建物跡群、西側から北側は竪穴住居跡群が広がり、両者の間は空白域となっている。これは集落の形成当初から両者を分離し、計画的に配置しようとする動きの現れと見ることができる。

住居跡は数軒を一単位とし、4群で構成される。中心は1号墳北側と建物西側のグループで、後者のグループには二彩椀・緑釉陶器皿などが出土する尾上木見津遺跡(第2地点)2号住居跡、土師器の刷毛甕や銭貨の「神功開寶」(初鑄765年)が埋納されていた14号住居跡など特徴的な遺物を出土する住居群が集まる。

掘立柱建物跡群は南北に柱筋を揃えた西側と、その東側に並ぶ一群がL字状に近い配置を示す。西側中央には桁行5間×梁行3間の大型建物、その南に桁行4間、北側に桁行3間の建物が並ぶ。大型建物を中心とした配列や同規模の建替えなどから、この建物が集落で最も重要な施設であることがわかる。

桁行5間以上の大型建物跡が検出された遺跡は郡内では7ヶ所ほどで、その多くが地域の拠点的な大規模集落である。それらに比べると本遺跡は集落規模が小さく、住居跡も大半が小型である。住居跡に比べ非常に大型の掘立柱建物跡群を構築する必然性は何か、大きな課題である。

文字資料

出土した文字資料は総数327点、そのうち墨書は283点、朱書は16点である。朱書は県内第2位の出土量で、墨書は印旛沼南東部では佐倉市高岡大山遺跡に次ぐ量である。

朱書は墨書と異なり地方官衙跡や寺社跡など限られた遺跡から出土する傾向が強いものとされている。事実、本県で最も大量に朱書が出土している柏市花前遺跡は、鉄素材から鉄器製作まで一貫した生産を実施する製鉄遺跡で、鑄型なども出土している。そのような特殊な性格の生産跡に次ぐ朱書の出土量、それに大型の掘立柱建物跡群の存在から、本遺跡は通常集落とは考えにくい。

一方、墨書土器は「奈野」が全体の約8割を占め、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、古墳など集落内の各種の遺構群から出土する。しかも長期間使用され、時空両面で集落の中核、表象とされる文字である。

また、「奈野」・「奈」は飯積原山遺跡や下流の本佐倉外宿遺跡でも出土しており、高崎川中流域の集団あるいは地名をさす可能性が高いものと判断される。

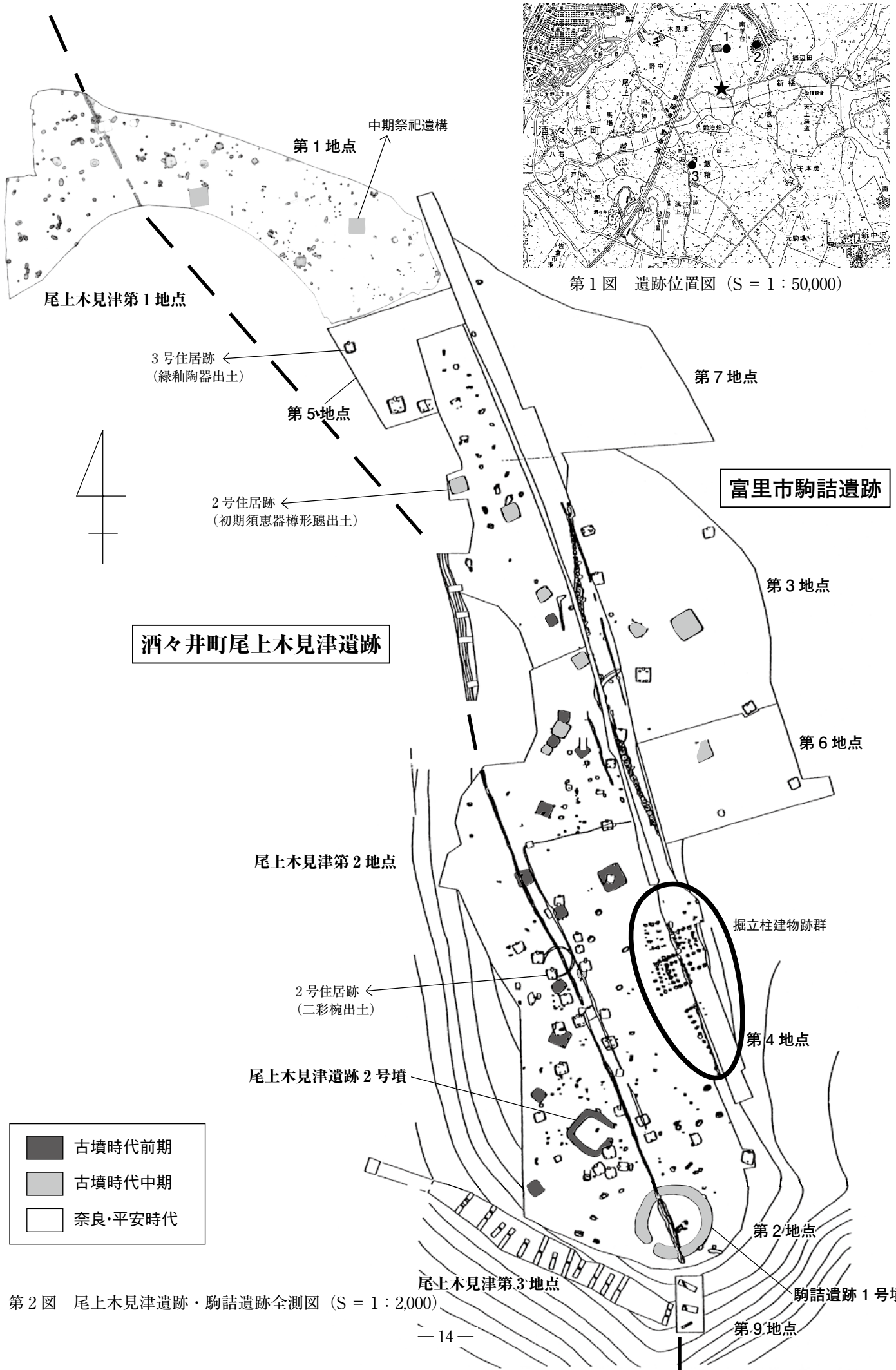
奈良・平安時代の祭祀

古墳時代に築造された駒詰遺跡1号墳の周溝から最も多く出土したのは、奈良・平安時代の遺物群である。周溝内の北側では複数の焼土痕跡の周囲から該期の土器類が出土し、奈良・平安時代においても、古墳の周囲で何らかの祭祀行為が執り行われたものと思われる。それは、「奈野・神奉」と2種類記載された墨書土器が1号墳のみの出土であることからもうなずける。その祭祀は「奈野」に関わるもので、執行には地域の官人層が関与した可能性を、周溝出土の帯金具が示唆する。

えんゆうとうき 鉛釉陶器

本遺跡では奈良三彩の一種、緑と白の二彩釉陶器の椀の完形品が出土している。発掘資料としては極めて稀有な資料で、緑釉陶器の破片類と共に平安時代の住居跡から出土した。奈良三彩は、奈良正倉院に伝世するものが最も著名だが、本遺跡の椀は、遺存状態だけではなく、使用場所・廃棄時期が明確な点では資料的価値が非常に高いものと思われる。

緑釉陶器も生産開始段階の平安京近郊の製品である。これら2種類の高級陶器(鉛釉陶器)が小規模な集落から出土することは極めて特異であり、郡内最大勢力の集団などを介してもたらされたと考えるのが最も自然ではないだろうか。





尾上木見津遺跡（第2地点）



駒詰遺跡（第2地点）



駒詰遺跡 1号墳



初期須恵器・樽形甕^{はそう}



初期須恵器・蓋



緑釉陶器・皿



二彩陶器・椀



墨書土器「奈野」